

「アミéria」試論(1)

——フィールディングの姿勢の問題を中心として——

国 友 慶 一

序

フィールディングは「アミéria」の巻頭にあるラルフ・アレンに捧げた献辞の冒頭で次のように云っている。——

The following book is sincerely designed to promote the cause of virtue, and to expose some of the most glaring evils, as well public as private, which at present infest the country. (本書は善を勧奨し、今日この国を毒している公私の甚だしい悪を暴露することを誠実な目的としている。)

又、第一巻第一章で次のように云っている。

The various accidents which befel a very worthy couple after their uniting in the state of matrimony will be the subject of the following history. (ある非常に立派な夫婦の結婚した後にその身に起るさまざまな事件がこの物語の主題である。)

この二つの宣言が「アミéria」の全体的な雰囲気、全体的な基調を決定し

(56)

ている。そしてこの二つの宣言が一つの芸術作品の中で如何に芸術的に融合しているか、その芸術的融合度に小説「アミーリア」の成立点がある。

[1]

「アミーリア」開巻早々（第一巻二章）に次のような場面がある。

On the first of April, in the year——, the watchmen of a certain parish (I know not particular which) within the liberty of Westminster brought several persons whom they had apprehended the preceding night, before Jonathan Thrasher, Esq., one of the justices of peace for that liberty. (某年4月1日、ウェストミンスター地区内のある教区（はっきり何処とは知らないが）の夜警が前夜逮捕しておいた数人をその地区の治安判事の一人であるジョナサン・スラッシャー殿の前に連れていった。)

……, Mr. Thrasher, however, the justice before whom the prisoners above mentioned were now brought, had some few imperfections in his magistratical capacity. I own, I have been sometimes inclined to think that this office of a justice of peace requires some knowledge of the law: for this simple reason; because, in every case which comes before him, he is to judge and act according to law. Again, as these laws are contained in a great variety of books, the statutes which relate to the office of a justice of peace making themselves at least two large volumes in folio; and that part of his jurisdiction which is founded on the common law being dispersed in above a hundred

volumes, I cannot conceive how this knowledge should be acquired without reading; and yet certain it is, Mr. Thrasher never read one syllable of the matter. (……………。しかしながら、上述の囚人達が連れられた治安判事スラッシャー氏は治安判事としての能力にいくつかの欠陥があった。治安判事というものは持ち込まれた事件の一つ一つに於いて法律に従って判定し職務を執行すべきであるという簡単な理由から或る程度の法律の知識は治安判事という職務には不可欠なものである——そのような気持を予はしばしば抱いたことを白状する。更に、是等の法律は多種多様な書物に含まれており、治安判事の職務に関する成文法は二つ折り判の大型版を少くとも二冊を成し、その司法権の内、慣習法に基づいている部分は百冊以上に分散されているので、この知識が読みもしないでどうして身につけられるのか予は知らない。が、スラッシャー氏がこの事柄を少しも読んだ事がないという事は確かな事なのである。)

冒頭に近いこの一節から読者は先ず治安判事の無知に驚く。

This, perhaps, was a defect; but this was not all: for where mere ignorance is to decide a point between two litigants, it will always be an even chance whether it decides right or wrong: but sorry am I to say, right was often in a much worse situation than this, and wrong hath often had five hundred to one on his side before that magistrate; who, if he was ignorant of the laws of England, was yet well versed in the laws of nature. He perfectly well understood that fundamental principle so strongly said down in the institutes of the learned Rochefoucault,

(58)

by which the duty of self-love is so strongly enforced, and every man is taught to consider himself as the centre of gravity, and to attract all things thither. To speak the truth plainly, the justice was never indifferent in a cause but when he could get nothing on either side.(これは恐らく欠陥だった。が、欠陥のすべてではなかった。といのは、単なる無知が二人の訴訟当事者間の争点に判決を下すとするなら、その判定の正当の可能性は常に五分五分であろう。が、英国の法律はほとんど知らないが、自然の法則には精通している治安判事の前では、残念なことだが、正義はこれよりはるかに悪い状態に置かれ、邪悪が味方を得る可能性が圧倒的に多い。博学のローシュフーコウ氏の諸原則⁽¹⁾の中で非常に強く主張されている根本的な原則——即ち、それによって、自己愛の義務が強く主張され、誰でも皆自己を重力の中心と考え、すべてをそこに引き寄せるように数えられている——をこの治安判事は完全に理解していた。卒直に本当を申せば、この治安判事、いずれの側からも何も貰えない時は別として、訴訟事件に決して無関心ではなかったのである。)

前節で治安判事の無知に驚いた読者は、今節で呆れて物が云えなくなってしまふ。

Such was the justice to whose tremendous bar Mr. Gotobed the constable, on the day above mentioned, brought several delinquents, who, as we have said, had been apprehended by the watch for diverse outrages. (前述したように、さまざまな無法な行為の為に夜警に捕えられた数名の過失者が、前述した日に巡査ゴートーベッド氏によって連れて行かれたのは、このような治安判事の恐るべき

法廷だった。)

そこでの裁判がまたなんともでたらめなのである。最初に裁判を受けた男は、彼よりはるかに頑丈な男により殴打罪により告発されたものである。ところが不思議なことに、刑事被告者が頭から血をダラダラたらし全身血だらけなのに対し、告発者は少しの負傷の様子もない。そして、この男が私の頭を棒で叩き割り、その弾みで彼の棒が折れたにすぎない、証人もいるから呼んでくれという哀れな被告人に対し、スラッシャー判事は次のように云う。

“Sirrah, your tonque betrays your guilt. You are an Irishman, and, that is always sufficient evidence with me”(この野郎、お前の方言がお前の犯罪を示していらい。お前はアイルランド人だ。それが俺にとっていつも十分な証拠なんだ。)

二番目に裁判を受けたのは貧しい女で、偶々十二時すぎに街を歩いていたというだけで買春婦として夜警に捕えられたものである。自分は召使で女主人が出産のため産婆を呼びに行くところだった、証人として幾人かの隣人を呼んでほしいという少女に対して、スラッシャー判事は少女に金が無いと分ると口ぎたなく罵り、有罪を宣する。

三番目は若い紳士淑女であり、判事殿の前ではとても口に出来ないような行為をしていたと非常に厳粛な様子の男が誓う。スラッシャー判事は書記から目くばを受けるとそんな事はある得えないと云って直ちに紳士淑女を釈放し、逆に申立人を偽証罪を犯したという始末である。

次に現われるのがブース (Booth) である。彼は職務執行中の夜警を打ち、カンテラをこわした廉で告発されたのだ。ところが実際は、彼が家に帰る途中で二人の男が別の一人を残酷に打っているのを見て助太刀に入ったところを四人一諸に夜警に捕えられたまでの事なのである。二人の攻撃者は金でうまく釈

(60)

放され、夜警はブースに半クラウン出せば釈放するとさえ云っているのである。

……………Had the magistrate been endued with much sagacity, or had he been very moderately gifted with another quality very necessary to all who are to administer justice, he would have employed some labour in cross-examing the watchman; at least he would have given the defendant the time he desired to send for the other persons who were present at the affray; neither of which he did. In short, the magistrate had too great an honour for truth to suspect that she ever appeared in sordid apparel; nor did he ever sully his sublime notions of that virtue by uniting them with the mean ideas of poverty and distress.

(……………もしこの治安判事がより多くの英知を授っていたなら、或いは法律を司るすべての者に非常に必要なもう一つの性質を程よく授けていたなら、その夜警に反対尋問をするぐらいの労を取ったことだろう。少くとも被告にその乱闘に居合わせた他の人々を呼びにやる時間を与えたことだろう。このいずれをも彼はしなかった。要するにこの治安判事は真実を非常に尊敬しているので、真実がいやしくも汚れた衣装を纏って現われるとは夢想だにしなかったのであるし、又、彼の崇高なる徳の概念を、貧乏と悲惨との卑しい概念と結びつけることによって、汚しさえしなかったのである。)

常識では一寸考えられないようなこうした治安判事が、しかし当時は決して珍しい存在でなかった。当時、治安判事には定った俸給というものがなく、職務上のチップを取る事が許されていた。しかし正直にやったら、これらのチップによる収入は高が知れていたもので、一流の人々は治安判事になりたがらなか

った。その結果、生れも卑しく才能も教育も無いような金銭づくの人間が治安判事の椅子を独占するようになった。彼等は私腹を肥やす事に汲汲としている。フィールディングが「今日この国を毒している公私の甚だしい悪を暴露する」に当り、先ず同業者たる治安判事の悪を暴露したのは、いかにも正義派の彼らしい一面を覗かせていて面白い。

さて、治安判事の悪の暴露を嚆矢として、公私の甚だしい悪が次から次へと暴露されて行く。刑務所の看守、債務者拘置所 (sponging-house) の執達吏 (bailiff), 弁護士 (attorney), 放蕩貴族 (rich and dissolute peer), 更にジェイムズ大佐 (Colonel James), トレント大尉 (Captain Trent), 姉ベティ (Betty) ……等々の悪がかなりはげしい調子で暴露されて行く。

悪の暴露は何も「アミーリア」に始ったわけではない。「ジョウゼフ・アンドルーズ」(Joseph Andrews, 1742) や「トム・ジョーンズ」(Tom Jones, 1749) でも悪の暴露は人間の利己主義の暴露という形をとっている。「ジョウゼフ・アンドルーズ」では上流の人々の利己主義が暴露され、「トム・ジョーンズ」ではさまざまな人間の利己主義が暴露されている。⁽²⁾しかしながら、「ジョウゼフ・アンドルーズ」も「トム・ジョーンズ」もその全体的雰囲気は決して暗いものではない。フィールディングは人間の利己主義、さまざまな悪徳に憤慨したけれど同時に滑稽なものとして笑いとばすだけの余裕を持っていたのである。すなわち、作者と題材の間に距離 (detachment) があったのである。ところが「アミーリア」になるとこの距離はなくなり、作者は題材と同じレベルに立っている。もはや笑いとばすような余裕は無く、全身全霊義憤に震えている。この姿勢、公私の甚だしい悪を暴露する積極的な姿勢こそ、「ジョウゼフ・アンドルーズ」や「トム・ジョーンズ」に無かつた姿勢であり、「アミーリア」の全体的雰囲気を決定しているのである。

〔 2 〕

技法上の新しさとして先ず目につくのは開巻早々にあるマッシュューズ嬢とブースの長たらしい自叙伝風の回顧談だろう。これは「ジョウゼフ・アンドルーズ」や「トム・ジョウンズ」に無かった技法上の新しさである。「ジョウゼフ・アンドルーズ」や「トム・ジョウンズ」では主要人物の小説登場以前の生い立ちや経歴は直接的な方法、つまり作者の口を通してさらりと語られているのに対し、「アミーリア」では、ブースとアミーリアの生い立ちやそれまでの生活がブースの回顧談という形で語られているのである。こうしたフラッシュバック手法は古くはホーマーのオディッセイやヴァーギルのアエネイスにも見られるものだが、「アミーリア」でこの手法を用いた時フィールドイングの頭の中にヴァーギルのアエネイスがあったのは、フィールドイング自身の次の言葉から明白である。――

……the candid and learned reader will see that the latter [=Virgil] was the noble model which I made use of in this occasion. (The Covent-Garden Journal, 28 January), (公平で学識ある読者なら、ヴァーギルこそ予がここで利用した高貴な模範であることに気づくことだろう。)

さて、この手法の出来栄えだが、残念ながら成功したものとは云い難い。先ずマッシュューズ嬢が身の上話を語り、次いでブースが語るという順序、二番煎じの味気無さ――そういった事にも多少はよるけれど、とにかく退屈だったことを白状する。

では一体、何故にフィールドイングは「アミーリア」に於いてこの手法を用い

たのであろうか。何故にこの作に限って、従来のイリアッド的手法を捨て、オディッセイ的手法を用いたのであろうか。その理由はさまざまだが、その一つはこの作に於ける作者の「姿勢」との関連に於いて考えられると思う。前述したようにこの作に於ける作者の「姿勢」は「ジョウゼフ・アンドルーズ」や「トム・ジョウズ」のそれとは比較にならぬ程積極的なものだった。少なくともこの世の悪徳、「公私の甚だしい悪」の暴露にかけては比較にならぬ程積極的だった。そして最初に槍玉に上げたのが治安判事スラッシャーだったわけである。正義派のフィールディングにしてみれば同業の治安判事のデタラメぶりが一番癪にさわったのだろう。とにかく一番最初に治安判事を槍玉に上げた。そして治安判事のデタラメぶりを示すには、デタラメな裁判場面が必要であり、それには犠牲となる幾人かの刑事被告者が必要となる。そして物語を進めるためには、この哀れな被告の中に、「ある非常に立派な夫婦」の中の一人が含まれている必要がある。そこで亭主のブースが含まれているのである。ところで公正な裁判が行われて無罪放免となつては治安判事の悪を暴露する趣旨に反する。そこで無実の罪で刑務所入りとなる。ところで刑務所よりすぐ釈放されたのでは、甚だしい悪の一つとして刑務所の実情（たとえば看守が囚人に対しすべてのことに料金を要求する風習とか男女同室の制度等）を暴露する趣旨に合致しなくなる。そのためにはある期間刑務所内に留め置かれる必要がある。他方、この男がこの物語の中心人物たる「非常に立派な夫婦」の亭主ならば、この男と妻君の生い立ちや前歴などをなるべく早く読者に示さねばならない。(少なくとも「ジョウゼフ・アンドルーズ」や「トム・ジョウズ」に於けるフィールディングの流儀はそうだった。この二作に於いてフィールディングは主要人物の生い立ちを真先にさらりと書いている。)ところがここまで来てしまつてから作者が乗り出して、直接的な手法で彼らの生い立ちやそれ迄の生活を述べたのでは何か一汽車乗り遅れたような気がする。そこで思い切って従来の直接的な方法を捨て、作中人物に己れの生い立ちや、それ迄の生活を語らせる間接

的な手法を用いたという考え方も或いは成立するのではないかと思われるのである。

[3]

登場人物の面からみると、新しい要素としてアトキンソン軍曹 (Sergeant Joseph Atkinson) が浮び上ってくる。この人物はアミーリアの乳兄弟であり、アミーリアを密かに愛しているが、それを口に出さず、アミーリアの幸福に資する事を無上の喜びとしている献身的な男である。こうした献身的な人物を、我々は「ジョウゼフ・アンドルーズ」や「トム・ジョウズ」の何処に見出し得るだろう。「トム・ジョウズ」第八卷第七章「パートリッジの行動の真の肚……」(Containing better Reasons than any which have yet appeared for the Conduct of Partridge……)と題する次の一節が「トム・ジョウズ」の全体的雰囲気을適切に表わしている。——

Though Partridge was one of the most superstitious of men, he would hardly, perhaps, have desired to accompany Jones on his expedition merely from the omens of the joint-stool, and white mare, if his prospect had been no better than to have shared the plunder gained in the field of battle. In fact, when Partridge came to ruminate on the relation he had heard from Jones, he could not reconcile to himself, that Mr. Allworthy should turn his son (for so he most firmly believed him to be) out of doors, for any reason which he had heard assigned. He concluded therefore, that the whole was a fiction, and that Jones, of whom he had often from his correspondents heard the

wildest character, had in reality run away from his father. It came into his head, therefore, that if he could prevail with the young gentleman to return back to his father, he should by that means render a service to Allworthy, which would obliterate all his former anger; nay, indeed, he conceived that very anger was counterfeited, and that Allworthy had sacrificed him to his own reputation. And this suspicion, indeed, he well accounted for, from the tender behaviour of that excellent man to the foundling child; from his great severity to Partridge, who knowing himself to be innocent, could not conceive that any other should think him guilty; lastly, from the allowance which he had privately received long after the annuity had been publicly taken from him; and which he looked upon as a kind of smart-money, or rather by way of atonement or injustice: for it is very uncommon, I believe, for men to ascribe the benefactions they receive to pure charity, when they can possibly impute them to any other motive. If he could by any means, therefore, persuade the young gentleman to return home, he doubted not but that he should again be received into the favour of Allworthy, and well rewarded for his pains; nay, and should be again restored to his native country; a restoration which Ulysses himself never wished more heartily than poor Partridge. (パートリッジ如何に迷信家と云え、まさか腰掛と白馬の古兆だけでは、精々戦場での掠奪に一枚加わる丈の見込しかないジョウonzの遠征について行く気にもならなかっただろう。ありやうはこの男、ジョウonzから聞いた話をよく考えてみると、聞いただけの理由でオールワージ氏がその子

(氏の実子であると彼は確信している)を叩き出したというのがどうしても腑に落ちない。そこで彼の結論は、万事は皆作り事、ジョウズの不しだらはしばしば人からの手紙でも聞いているし、事實はジョウズが父の許を出奔したのだという考。そこで思い浮んだのは、この青年紳士を父の許に戻るよう説得出来るならば、これはオールワージに忠勤を致すことになり、昔の怒を帳消しすことにもなる、いやどだいな怒そのものがうわべだけの事で、オールワージは自分の声望を救うためにこのわしを犠牲にしたのだ、というのが彼の考である。この考は、あの有徳人が拾い児に示したやさしさとパートリッジ自身への峻厳さから容易に説明がつく。自身無罪を知るパートリッジは他人が自分を有罪と考えるとは夢にも思い得ないのである。年金が公に褫奪されたずっと後まで彼が秘かに受けていた送金もこの考を裏書きする。この金を彼は一種の涙金、或は不正の償ひと見ている由来人の恩恵を受ける者が、何かそこに少しでも他の動機を考え得る限り、それを純粹の慈善心の所為に帰する事は極めて珍しい事なのである。かやうな訳で、もしこの青年紳士を何とかして家に帰るやうに説き付け得るならば、再びオールワージに好意を以って迎へられ、労苦には十分の報償を受ける事は疑ない。のみならず再び生れ故郷に帰り住む事にもなる——これはそのかみのユリシーズにもまして哀れなパートリッジが切願する所である。)

「ジョウゼフ・アンドルーズ」や「トム・ジョウズ」には無いアトキソン軍曹の如き献身的な人物を、では何故「アミーリア」に登場させたのだろうか。その理由の一つではないが、本質的にはやはりこの作に於ける作者の姿勢と直結しているように思われる。「ジョウゼフ・アンドルーズ」や「トム・ジョウズ」ではフィールドディングは作中人物の利己主義を暴露しながらも同時に滑稽なものとして笑っている。つまりフィールドディングの姿勢は傍観者的、第三者

的姿勢だったのである。ところが「アミーリア」になると、フィールディングは人間のさまざまな悪徳を滑稽なものとして笑えなくなっている。何とかしなければという切迫した気持になっている。つまり、当事者的になっているのである。そうした切迫した気持、当事者的な姿勢から、「今日この国を毒している甚だしい悪」に対するアンチテーゼとしてアトキンソン軍曹のような ‘a fellow of a noble spirit’ を登場せしめたという見方も或いは成立するのではないかと思われるのである。

〔 4 〕

「ジョウゼフ・アンドルーズ」や「トム・ジョウズ」では、愛し合っている恋人同志が外的事情（主として身分）のために結ばれず、物語は愛と身分の対立という形で進むが、やがて意外なことから外的事情がとれ、すなわち身分の立派なことが分り、恋人同志は結ばれるという設定になっている。

「アミーリア」では愛し合って結婚した夫婦がその結婚した後の生活に於いて外的事情（貧困）によって苦しめられるが、最後に意外な事から外的事情がとれ、すなわち貧困が退散し、夫婦は苦しい生活から解放される——という設定になっている。そして「ジョウゼフ・アンドルーズ」や「トム・ジョウズ」では愛と身分の対立といってもそれは何かオブラートに包まれたような力のない弱々しい対立となっている。フィールディングは愛と身分とを一応対立させてはいるものの、それは物語を進めるための便宜的な手段にすぎず、彼の主眼は明らかに別のところ⁽⁸⁾にあったのである。これに反し、「アミーリア」に於ける愛と貧困の対立はかなりはっきりしている。つまり、フィールディングの主眼がこゝにあったわけであり、貧困が夫婦間の愛をいかに脅かすかという問題を真正面から扱っているのである。こゝに主題上の新しさがある。

夫婦の名はブーズとアミーリア、そしてフィールディングは二人の愛の強さ

(68)

を試すかのようにさまざまな試練を与えている。が、本当に‘立派な’という名に値するのは妻のアミーリアであって、亭主のブースはお義理にも立派とはいえない。ブースという男は‘a man of consummate good nature’ というように善良な男ではあるけれど、なんとも愚か者であり、彼の愚行のために妻のアミーリアはどれ程苦勞することか。アミーリアの引き立て役以外の存在価値は先ず考えられないような男である。

これに配するアミーリアは誠に立派な女性である。猛烈に夫を愛し、子供達を愛する。(アミーリアは子供を母親らしい愛情で愛した英国小説史上最初の人物である。)そして彼女の愛を試すかのように、貧困がさまざまな悪が彼女の生活を脅かす。金持の放蕩貴族やジェイムズ大佐が彼女をものにしようと色々奸策をめぐらすのも彼女が貧しいからであり、彼女の夫の愚行が非常に彼女の生活に響くのも彼女が貧しいからに他ならない。(「アミーリア」は貧困の悲劇をテーマにした英国小説史上最初の作品といえる。)そして、彼女が田舎育ちであり、都会の裏側を知らないために奸策者達の対象となっていることになかなか気づかず、又気づいてからもそれから逃れるすべを知らない点に悲劇性があり、更に、彼女の夫の弱さ、間抜けさが彼女を苦境に追いやる事が悲劇性を一層高めている。

But before we introduce him to Amelia we must do her the justice to relate the manner in which she spent this unhappy evening. It was about seven when Booth left her to walk in the park; from this time till past eight she was employed with her children, in playing with them, in giving them their supper, and in putting them to bed.

When these offices were performed she employed herself another hour in cooking up a little supper for her husband, this

being, as we have already observed, his favourite meal, as indeed it was her's; and in a most pleasant and delightful manner, they generally passed their time at this season, though their fare was very seldom of the sumptuous kind.

It now grew dark, and her hashed mutton was ready for the table, but no Booth appeared. Having waited therefore for him a full hour, she gave him over for that evening; nor was she much alarmed at his absence, as she knew he was in a night or two to be at the tavern with some brother-officers; she concluded therefore that they had met in the park, and had agreed to spend this evening together.

At ten then she sat down to supper by herself, for Mrs. Atkinson was then abroad. And here we cannot help relate a little incident, however trivial it may appear to some. Having sat some time alone, reflecting on their distressed situation, her spirits grew very low; and she was once or twice going to ring the bell to send her maid for half-a-pint of white wine, but checked her inclination in order to save the little sum of sixpence, which she did the more resolutely as she had before refused to gratify her children with tarts for their supper from the same motive. And this self-denial she was very probably practising to save sixpence, while her husband was paying a debt of several guineas incurred by the ace of trumps being in the hands of his adversary. (X. v)

(しかし我等は彼(=ブース)をアミーリアに引き合わす前に、彼女がこの不幸な夜をどのようにして過ごしたかを語るのが彼女に対して公平

(70)

というものだろう。ブースが公園の中を散策するために彼女のもとを離れたのは七時頃だった。そしてこの時から八時すぎまで彼女は子供達と遊んだり、子供達に夕食を与えたり、床につかせたりして子供達の世話にあけくれていた。

これがすむと、彼女は更に一時間、夫のためのささやかな夕食を料理することに勤しんだ。この料理、前述したように夫の好物であったが同時に又彼女の好物でもあった。彼等の料理は決して豪華なものではなかったけれど、この季節にはいつも非常に楽しく愉快に夕食時を過ごすのが常だった。

さて、今や暗くなり、細かく切られて料理された肉が食卓に出されるばかりになっていたがブースは帰ってこなかった。丸一時間待って彼女をその晩は諦めた。一晚や二晩は将校仲間達と居酒屋で過ごす事を知っていたので、別に彼女は驚かなかった。公園で将校仲間と出会い、一緒に今夜を過ごすことになったのだと彼女は結論を下した。

それで十時に彼女は一人で夕食を取った。アトキンソン夫人は外出していたのだった。そしてこゝで我等はある人々にはどんなに取るに足らぬように見えようとも一寸した事件を語らざるを得ない。自分達の悲惨な状態を考えながら一人でしばらく坐っていると、非常に気が滅入ってくるのだった。彼女は半ピントの白葡萄酒を女中に持ってこさせるために、二度今にもベルを鳴らそうとしたが、その六ペンスを節約するためにその気持を押えた。先程、同様な動機から子供達の夕食に果物入りパイを振舞うことを拒絶したが故に一層きっぱりとその気持を押えたのだった。そしてランプのエースが相手の手の中にあつたことによって引き起された数ギューの借金を彼女の夫が支払っている時に、彼女は恐らく六ペンスを節約するためにその自制を行っていたのである。

こゝには「ジョウゼフ・アンドルーズ」や「トム・ジョウズ」に無かったペイソスがある。日常性の中にある悲劇性から生じるペイソスがある。そして、この類い稀なペイソスにこそ、フィールディングの巻頭の二つの宣言が芸術的に融合し、小説「アミーリア」の成立点がある——と私は考えたいのである。

第一の宣言に見られる「公私の甚だしい悪」が実は第二の宣言に見える「ある非常に立派な夫婦の結婚した後にその身に起るさまざまな事件」の原因となっているのである。そしてそれを描く作者の態度が極めて当事者的であるとするなら、その作品の全体的雰囲気はペイソス以外の何になり得るだろう。そしてこのペイソスに小説「アミーリア」の芸術的価値があると思えるのである。

[5]

ロンドン・マガジン (The London Magazine) の1748年の12月号に次のような記事が見える。——

Not only pickpockets, but street-robbers and highwaymen, are grown to a great pitch of insolence at this time, robbing in gangs, defying authority, and often rescuing their companions, and carrying them off in triumph.

(すりばかりでなく、辻強盗や追剥も、この頃非常に傲慢無礼となり、群れを成して強盗を働き、当局を無視し、しばしば仲間を助け出し、意気揚々と連れ去るのである。)

この記事からもその一端が窺えるように、当時のロンドンに於ける盗賊の横行は想像に絶するものがあつた。その原因は、下層民の極度の生活苦、エイク

スラーシェペル条約(The Treaty of Peace of Aix-la-Chapelle, 1748年10月7日)による大幅な軍人除隊, ロンドンの照明設備の不備や入り組んだ地形, 警察制度の不備, 一般の人々の非協力的傾向, 等であるが, 要するにこの盗賊の横行は, 「今日この国を毒している公社の甚だしい悪」の氷山の一角にすぎなかったのである。時あたかも治安判事を任命され, 「公私の甚だしい悪」とじかに接したフィールディングはかなりの動揺を受けたに違いない。これは何とかしなければいけないと痛感したに違いない。それは「陪審員への訓示」(A Charge to the Grand Jury, 1749) や「近時漂盗の激増せる原因の調査, ならびにその対策についての建言若干」(An Enquiry into the Causes of the Late Increase of Robbers, etc. with some Proposals for Remediating this Growing Evil, 1751) などから窺い知ることが出来る。この何とかせねばという切迫した気持が「アミーリア」に於けるフィールディングの当事者的姿勢となっている。さまざまな悪と対決するフィールディングの姿勢は傍観者的, 或いは何か焦点が定まらないようなぼんやりした態度(「ジョウゼフ・アンドルーズ」と「トム・ジョウズ」)から当事者的, 或いは焦点が一つに定まり, それに全エネルギーを投入する態度(「アミーリア」)へと推移しているのである。そして, この姿勢の推移は, 作者が作中人物に対して持つ「距離」の差に直結している。「ジョウゼフ・アンドルーズ」と「トム・ジョウズ」ではフィールディングは作中人物に対して一定の距離を持っており, それは, 人間の理想像として描いたアダムズ牧師(「ジョウゼフ・アンドルーズ」)とトム・ジョウズ(「トムジョウズ」)に就いてさえ例外でなかった。フィールディングは両者を夫々の作品に於いて人間の理想像とはしているものゝ, 心のどこかでくすくす笑っているような感じさえするのである。つまり, フィールディングはあくまで作品の世界の外側に居たのである。ところが「アミーリア」になると, 作者と作中人物との間の距離が無くなっている。作者は作中人物の世界の内側に入り込んでしまっている。人間の理想像として描いたアミーリアは正真

正銘の理想像となっているのである。

[6]

「アミーリア」の終末近くに(XII, vi),次のような場面がある。——

The attorney wanted no better hint to accelerate his pace; and, having the start of the doctor, got downstairs, and out into the street; but the doctor was so close at his heels, and being in foot the nimbler of the two, he soon overtook him, and laid hold of him, as he would have done on either Broughton or Slack in the same cause.

This action in the street, accompanied with the frequent cry of “Stop thief!” by the doctor during the chase, presently drew together a large mob, who began, as is usual, to enter immediately upon business, and to make strict inquiry into the matter, in order to proceed to do justice in their summary way.

Murphy, who knew well the temper of the mob, cried out, “If you are a bailiff, show me your writ. Gentlemen, he pretends to arrest me here without a writ.”

Upon this one of the sturdiest and forwardest of the mob, and who by a superior strength of body and of lungs presided in this assembly, declared he would suffer no such thing. “D—n me,” says he, “away to the pump with the catchpole directly —— show me your writ, or let the gentleman go —— you shall not arrest a man contrary to law.”

He then laid his hands on the doctor, who, still fast gripping the attorney, cried out, "He is a — villain I am no bailiff, but a clergyman, and this lawyer is guilty of forgery, and hath ruined a poor family." "How!" cries the spokesman — "a lawyer! — that alters the case."

"Yes, faith," cries another of the mob, "it is lawyer Murphy. I know him very well." "And hath ruined a poor family? — like enough, faith, if he's a lawyer. Away with him to the justice immediately."

(弁護士が歩調を早めるのにこれ以上のヒントを必要としなかった。そこで弁護士は牧師に先んじて階段を下り、街路に出た。しかし牧師はすぐ後に迫っており、しかも弁護士より足が速かったのですぐに追いつき、ブロートンかスラックでの場合と同じように捕えた。

街路でのこの捕り物は、追跡中牧師が「泥棒！」としばしば叫んだこともあって、まもなく大勢の人々が集ってきた。彼等はいつものように直ちにこの事件に介入、彼等の即決方式で裁判を行うために、本事件の厳密な調査に乗り出した。

大衆というものの性質をよく知っているマーフィ（弁護士）は、こう叫んだ。——「君が執達史なら、令状を見せ給え。みなさん、この男は令状もないのに私を逮捕しようとしているのです。

すると、群衆の中で最も違しくて出しゃばりで、肉体と肺とのすばらしい力によってボス格の男が、そのような事はさせないと叫んだ。「畜生！ この執達史野郎をポンプのところに引っ立てゝやれ。令状を見せろ。さもなければその紳士を放せ。法に背いて人を逮捕させないぞ。」

そう云って、その男は牧師に手をかけた。

牧師は以前としてしっかりと弁護士を捕えていたがこう叫んだ。——

「この男は悪党です。私は執達史ではありませんが牧師です。そして、この男は文書偽造罪を犯し、貧しい一家を破滅させたのです。」

「何だって？」と、その代弁者。「弁護士だって？ そして事実を変えたって？」

「そうだ、たしかにそうだ。」と群衆の別の一人が叫んだ。「この男はマーフィ弁護士だ。私はこの男をよく知っている。」

「そして、貧しい一家を破滅させたって？ 弁護士なら十分ありそうな事だ。すぐに治安判事のところに連れて行け。」

この一節は我々に少なくとも二つの事実を認識させる。一つは街路で悪徳弁護士を捕えるハリソン牧師 (Dr. Harrison) の姿である。ハリソン牧師は、アダムズ牧師やオールワージー氏 (Mr. Allworthy) と同系統の人物だが、前二者とは比較にならない程、悪と戦うに積極的であり具体的である。

It was a maxim of his that no one could descend below himself in doing any act which may contribute to protect an innocent person or to bring a rogue to the gallows.

(どんなであれ、無実の人を守り、悪党を絞首刑に処するのに資する行為を誰も彼程身を下して成し得ない——というのが彼の格言の一つだった。)

ハリソン牧師の積極性、具体性、当事者性は、「アミーリア」に於けるフィールドディングの姿勢と直結している。オールワージー氏とハリソン牧師との違いは、「トム・ジョウンズ」と「アミーリア」とに於けるフィールドディングの姿勢の違いを物語っている。

もう一つは、一般大衆に関してである。フィールドディングは犯罪の増加の原

(76)

因の一つとして、一般大衆の非協力性を考えており、何とかしなければという呼びかけの気持が上述のような場面となっているのである。つまり、作者の当事者的姿勢から生じているのである。

[7]

こうしてみると、「アミーリア」の問題点や新しさは、すべてアミーリアに於けるフィールドイングの当事者的姿勢に直結し、そこから生じていることが分る。そして、この当事者的姿勢が作者の巻頭の二つの宣言と絡み合う時、そこに類いまれなペイソスが生じたのだった。上述の夕食の場面や、第十一巻九章などには類いまれなペイソスが漂っている。そして、この類いまれなペイソスに小説「アミーリア」の成立点があるわけだが、さてこの小説の出来栄えはどうだろう。この小説では作者の対象は焦点がはっきりしており、作者の姿勢は極めて積極的当事者的である。この点からみて、この小説の密度、切迫性は「ジョウゼフ・アンドルーズ」や「トム・ジョウズ」のそれとは比較にならぬものがある。そして、この小説の問題点や新しさはすべて作者の当事者的姿勢に直結し、それによって互に結びついている。どこからみても完璧である。が、それでもなを、この小説を読み終えた時、何か物足りない感じがするのはどうしてなのだろう。前作「トム・ジョウズ」を読んだ時のような充足感を味あえないのはどうしてなのだろう。この小説の欠点はどこにあるのだろう。それはこの作に於ける作者の姿勢そのものに問題があったと私は考えたい。この作に於けるような切迫した当事者的姿勢、作中人物の世界に入り込んでしまったような当事者的姿勢は、フィールドイングの本来の姿勢ではなかったのである。彼の体質に合致した姿勢ではなかったのである。フィールドイングという作家は、心のどこかでくすくす笑いながら、あく迄外側に立って傍観者的に描くところに本領があったのである。「アミーリア」が、それ自体、完璧に近い作品な

がら、何か張りつめた糸が今にも切れそうな不安定な感じがするのは、フィールドイングのアミーリアに於ける姿勢が彼自身の体質に異質なものであったからに他ならないと私には思えるのである。 (39年10月11日記)

[1] La Rochefoucauld (1613-1680), フランスのモラリストで、人間の行動の底に自己愛のみを見出し、数々の格言を残した。代表的な例として次のようなものがある。

—
Self-love is the greatest of flatters.

The gratitude of most men is but a secret desive of receiving greater benefits.

We should often be ashamed of our very best actions if the world only saw the motives that caused them.

In the misfortunes of our friends there is always something that gives us no pleasure.

[2] 拙稿『ジョウゼフとトムフィールドイングの人間観の推移』(文学部論叢十九号) 参照。

[3] 拙稿『トム・ジョウズ』小論(「パースト」4号) 参照。